3. 調査結果

（3）援助規範意識・ボランティア活動継続動機および自由記述に関する結果および考察

群馬大学教育学部　岩瀧　大樹

1．はじめに

今回の限界突破キャンプの実施にあたり、本稿では参加した子供たちへの直接的支援を担当したスタッフ（事前；男性４名・女性１名、事後；男性５名、女性１名。すべて 20 代）の変容について、箱井・高木（1987）による他者の援助に対する心性である「援助規範意識尺度（返済規範意識・自己犠牲規範意識・交換規範意識・弱者救済規範意識の４因子からなる全 29 項目。本稿では 23 項目を使用）」、ボランティア活動へのモチベーションに焦点を当てた、妹尾・高木（2003）による「ボランティア活動継続動機測定尺度（自己志向的動機・他者志向的動機・活動志向的動機の３因子からなる全 16 項目）」を用いて、共に４件法でキャンプ前後におけるアンケート調査を実施した。また、毎日の振り返りとして、子供たちへの関わりでうまくいった点、うまくいかなかった点を取り上げ、自由記述による内省の機会を設定していった。結果を以下に示す。

2．結果と考察

（1）心理尺度より

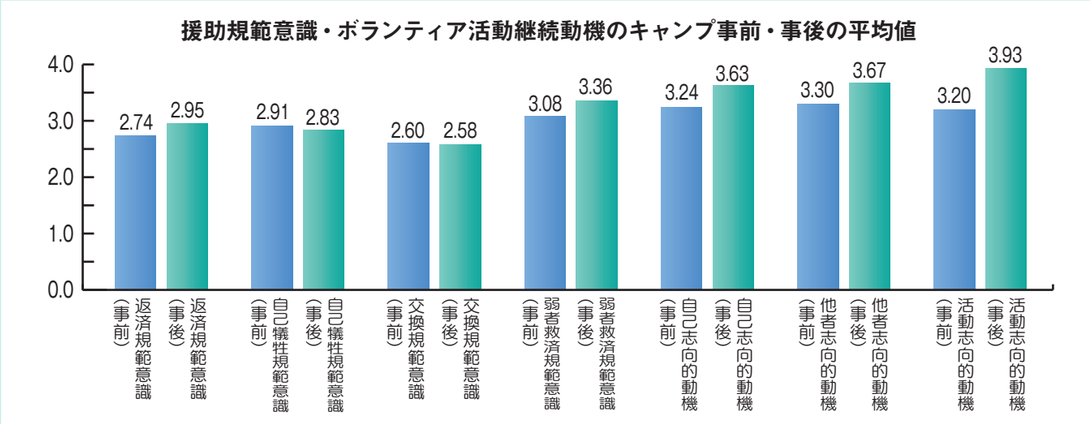
被験者数を踏まえ、敢えて比較検討は割愛したが、ボランティアに対する意識の観点で得点が上昇していた。ボランティア体験により、継続した今後の活動への意識が高まる可能性を改めて検討する必要があろう。また、援助規範に関しては、他者からの援助を自分のできる方法で返す、自分のできる範囲を見極めて援助をしていこうとする意識へのはたらきかけに影響する可能性がうかがえた。

（2）自由記述より

うまくいった点として、登山などで困ったり、疲れたりしている子供たちへの声がけ、励まし、賞賛などが挙げられていた。子供たちの状況を適切に把握し、必要に応じたサポートが体験において機能していたと推察される。うまくいかなかった点としては、野外炊事やテント設営での安全面や時間厳守に関する指示・指導の方法などコミュニケーションにおける点があげられていた。しかし、スタッフ同士の連携、子供たち各々の特性への理解を深めながらの対応、段取りの確認や工夫などを検討し、上記の課題に取り組み、試行錯誤しつつもブラッシュアップを重ねていた様子が推測された。

（3）総合考察

子供たちとのコミュニケーションに関する課題を、各々の子供の個性に応じたり、スタッフ同士で情報共有したりすることで、立体的に子供を理解することにより、クリアできていた記述が散見された。また、事前事後オリエンテーションに参加した５名のスタッフの期待と不安に関しては、前者は 82%から 90%に、後者は 48%から 18%に変容していた。子供たちの支援を通じて、目の前の課題に気づき、協力して取り組むことで、ボランティア活動を充実させていたと推察できる。



4. 事後のアンケート結果

（1）１か月後の参加者アンケート結果

①苦手な教科にも挑戦して取り組むようにしました。うまくいかないときも、ポジティブに考え直してから、またがんばってみました。

②応援の言葉は大事ということを学んで、学校の陸上練習や運動会練習などで、「がんばれー」とか「ファイト！」とか、応援する言葉が増えました。

③自分から率先して家事を手伝ったり、勉強机の周りを整理したりと、身の周りの「整備」を中心にやっています。

④家で家族にもごはんを作ることができています。特に一番多く作るのは焼きそばです。さっと手を出せるようになりました。

（2）１か月後の保護者アンケート結果

①キャンプ前に比べて、時間を考えて行動することができるようになったと感じています。放課後や休日に時計を持ち歩くようになりました。また、身の回りの整理整頓も以前に比べできるようになりました。忙しさで乱れてしまうこともありますが、洗濯物をたたむだけで終わりにせず、しまうことをやってくれたり、妹や弟に声をかけてくれたりすることも多くなりました。

②中学生の先輩やボランティアの方から、たくさんの姿勢を学び影響を受けたようでした。「いつか赤城で班付きリーダーになりたい！」と子供が言っているように、ボランティアさんが子供たちの憧れの存在だったようです。その夢がいつか叶うよう、自然や人を大切にできる温かい子に育てていこうと考えています。

③自己肯定感がアップした気がします。子供本人が「僕って他の子とちょっと…」と自覚はしていたものの、学校生活では集団の中での居場所探しで失敗の連続。しかし、キャンプ後ではどこか堂々としている気がします。「僕はこのままで良いんだ」と腑に落ちたのかもしれません。